

学 長 殿

2019年 4月 4日

2018年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

学科、委員会等：子ども未来学科

該当番号 対象の取組

① 初年次教育

申請（代表）者： 外川重信 印

1. 取組の名称

野外活動実施による子ども未来学科1年生の初年次教育における人間関係構築の取組

2. 取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを丸で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	申請者及び外川重信、基礎演習担当教員及び保育マインド実践講座担当教員（番匠一雅、印藤京子、染谷裕子、三政洋一、関維子、瀬川千津子、福田篤子、長谷川洋昭、望月隆之、清水道代）
----	----	--

3. 取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

5月26日（土）黒川野外活動センターにおいて、1年生全員がグループに分かれ、午前に飯盒炊飯、午後に人間関係作りの野外ゲームを行った。指導教員は、基礎演習担当教員と保育マインド実践講座担当教員であり、全体の責任者として学部長の外川が担当した。また、補助学生として、上級生がボランティアとして1年生の活動を支援した。本活動の有効性を検証するために、活動前後に状態-特性不安テストを実施、加えて学生による実践の振り返りを自由記述で行った。検討結果については2019年3月発行の教職課程年報に掲載した。

4. 取組の成果

学生が入学後の早い段階で仲間や教員との関係構築を図ることが、4年間の学生生活の良好なスタートにつながると考え、特別授業を実施した。①教職課程年報第2号、『初年次教育における野外活動の有効性—教職課程・保育士養成課程における試み—』田園調布学園大学教職課程年報第2号（p79-93）によれば、学生の野外活動に対する満足度について、全項目1～5の範囲で回答を求めているが、活動に関する満足度は高いものであったと言える。②おなじく、状態不安と特性不安の全体の比較を行った結果、状態不安、特性不安ともに活動前よりも活動後のほうが有意に尺度得点が低くなっていることが明らかになった。③よって、今回の野外活動の取り組みは、初年次教育において有効であることが示され、より良い学生生活のスタートにつながったと推察される。

5. 課題・問題点

①次年度も実施すべきとの意見が多かったため、引き続き行う予定である。②感想文にもあるが、初めてのプログラムのため5月に実施したが、もっと早い時期が良いとの意見があり、2019年度は4月に実施する予定である（川崎市黒川野外活動センター予約済み）。③今回、大学側からの多大なる補助金を得られ、多くの炊飯関係の道具を購入することができたが、その道具の置き場所の確保など整理整頓する場所などの確保が必要であると思われる。④外川ゼミを中心とした上級生による献身的なボランティアの手伝いが、1年生へ安心感を与えたばかりでなく、各アドバイザーへ大きな補助的貢献があった。交通費などの給付が必要であると考え。

6. 自己評価

本学1年生を対象とした野外活動の実施は、その後の人間関係構築に一定の効果があると言える。今後も引き続きその検証を行っていくことは重要である。

7. 今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

今年度も、反省を踏まえて実施する予定である。ただし、「5. 課題問題点」で指摘した点については改良していく。

学 長 殿

2019 年 4 月 8 日

平成30年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

学科、委員会等： _____

該当番号 対象の取組

--	--

申請（代表）者： _____ 藤森 智子 _____ 印

1. 取組の名称

多文化共生に関わるプログラムの開発

2. 取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを~~を~~で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	藤森智子、渡辺由己、宮森孝史、三政洋一
----	----	---------------------

3. 取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

本プロジェクトは、大学各学部の教員と国際交流委員会とが連携して多文化共生に関わるプログラムの開発を目指すものであった。多民族多文化国家の台湾を研修先として、将来、台湾の大学を通じて語学、文化、学生交流、社会見学などのプログラムを行うために台湾の大学や文化施設の視察を行い、プログラムを検討するのが取組の骨子であった。実施されたスケジュールは次のとおりである。4月、国際交流委員会で、大学間協定の締結を視野に入れ、研修先となりうる大学の選定を行った。5月、国際交流委員長藤森が台中の弘光科学技術大学を訪問し、大学施設視察、関連学科の学科長との面会、市内視察、周辺文化施設訪問を行った。この時に後日DCUのスタッフが訪問すると約束し、帰国後、協定締結や交流に関して学長、副学長と協働しながら、先方とメールで協議を続け、11月、藤森委員長、三政委員、藤井委員の3名が視察のために台湾を訪問した。3泊4日の日程のうち、2泊を台中で過ごし、弘光科学技術大学にて、5月と同様の視察を行った。この時には先方の国際長はじめ国際交流委員のメンバーと会談し、将来的な交流の可能性について具体的に話し合った。この結果は学内に報告し、協議された結果、諸手続を経て、本学と弘光科学技術大学との間に協定を結ぶことが決定した。これを受けて、3月、生田学長、田中事務局長、藤森委員長、寺崎委員が弘光科学技術大学での調印式に赴き、両校の協定が締結された。

4. 取組の成果

まずは、弘光科学技術大学との協定が締結されたことが挙げられる。本学が包括協定を結んでいる提携校は英国カンタベリー・クライストチャーチ大学のみであったが、これに続き、弘光科学技術大学との協定が締結されたことになる。社会福祉や幼児保育などの本学と専門性が一致する大学と協定を結んだことで、今後の学生・学術交流が大いに期待される。次に、先方大学から、夏の国際サマーキャンププログラムに本学から2名の学生が招待された。各国から学生が集まり、異文化コミュニケーションを体験しながら中国語や台湾文化を体験する台湾短期研修が実現する運びとなった。最後に、本予算を獲得することで、本学から複数名のスタッフの台湾視察が実現できた。委員長はじめ、3名の委員が弘光科学技術大学や、台湾の文化・社会を視察することで、提携校に対する認識、理解を持ち、ひいては台湾社会への認識も共有することができた。調印式に参加された学長、事務局長を合わせ、6名にのぼる本学スタッフが台湾認識を共有し文化交流を体験することで、今後、台湾・弘光科学技術大学との実質的で双方向的な国際交流につながる事が期待される。台湾との交流事業に関しては、学校ガイドに掲載される予定である。

5. 課題・問題点

国際交流は相手があることなので、いろいろなことが必ずしも予定通りに実行できるとは限らない、ということを実感した。台湾と日本の学年暦を比べ先方と協議しながら、幸い双方の業務に支障のない日程で訪問することができた。密に連絡を取り合える関係を構築することが国際交流では重要であると感じる。

6. 自己評価

今回の取組は、台湾の大学との協定締結、2名の学生の先方大学での短期研修（予定）が実現した点で、非常に実りある結果になったと評価する。当初の目的が達成された結果となった。関連する各学部の教員方々、また学長、副学長と密に協議しながら、国際交流委員会の教職員が一丸となって取り組んだ結果であり、また、学長、副学長、事務局長、関連する各部署の課長、教員皆様の理解と協力あつての結果であつたといえる。

7. 今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

提携校とは、今後学生交流、学術交流を展開する予定である。先方と協議しながら進める予定であるが、まずは夏休みに先方大学で実施される国際サマーキャンプへの学生派遣が予定されている。この他には、福祉、保育実習の交換、学生の交換留学、交換教授など、様々な交流の可能性が協議されている。検討を重ねて実現していきたい。このほか、台湾の短期研修に関しては、国際交流委員会を中心にパイロットを立ち上げ、全学学生を対象にした研修旅行を企画している。提携校との関係を生かし、双方向的な交流が実現できる研修となるよう検討を重ねている。